
俺達はまるで迷路の中の迷子のように

翼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達はまるで迷路の中の迷子のように

【Nコード】

N0132I

【作者名】

翼人

【あらすじ】

終わりでもあり、始まりでもある中学3年の卒業式・・・俺達は彼女を失った。過ぎ去るトラックの音、捻じ曲がって壊れた自転車、ふらつく身体、そして。俺の目の前で血を流し倒れている、彼女。何が起きたのかわからなくて、ただ彼女の名前を叫んだ。「なあ、夏希。俺さ・・・」もし、もう一度彼女に会えるのなら、あの時どうしても言えなかった、あの言葉を伝えたい。翼人が涙腺崩壊モンの少女漫画に触発されて勢いで書いた、(たぶん)泣ける(はず)純愛ストーリー!!

だったら感情を捨てればいい。

嬉しい、楽しい、悲しい、悔しい・・・全ての感情を封印して、何にも期待せず、なるがまま、なされるがままに、ただ淡々と生きるんだ。

俺は無関心という関心の中で、ただ渦を描くかのように廻り続ける。そうだ。

何かを想って生きる事が、こんなにも、・・・つらいのならば。

今日、俺の友人が死んだ。

交通事故だった。

自転車で二人乗りをしていて、そいつは後ろ側だった。

そう、きつと二人で楽しく何気ない会話でもしている最中、青信号の横断歩道をもう少しで渡り切るって時に、信号を無視したトラックの運転手がそのまま二人の乗ってる自転車に突っ込んで・・・。

たまたま人気の少ない通行路だったんだ。

運が悪かったとしか言いようがない。

トラックは別にそんなにすごいスピードで走っていたというわけじゃなかった。

だから、二人は自転車から先の歩道に身を投げ出されたくらいですんだんだ。

そう・・・、すんだはずだった。

夏希^{なつき}。

あまりにも一瞬の事で、何があつたのかわからなかった。

立ちくらみで歩きにくくて、視界がぼやけて前が見えなくて、それでも彼女はどうなったかと、懸命に立ち上がり辺りを見渡した。ふらつきがちな身体を叱咤し、なんとか動かして、彼女の名前を呼びながらどこにいるのかもわからない彼女へと手を伸ばして。

夏希。

彼女を求めて彷徨う腕、脚、眼。

そして、ふと俺の視界に入った色。

トラックの過ぎ去ったアスファルトの地面に広がる液体、赤より少し黒い・・・。

それは、血の色だった。

止まることを知らず、どンドン広がっていく血。
そして、その中には。

気づいた時にはただ無我夢中に走り出していた。
身体の全感覚が麻痺している気がして、俺が彼女の名前を叫ぶ声も、足音も、木々のざわめきも、風の音も、何一つ俺の耳には入っていない。目の前が真っ白になって、走っているはずなのに、まるで立ち止まっているような気分だった。

俺にとってそれは、それほどの衝撃だったんだ。

夏希。

あっという間に血溜りができ、その中に力なく倒れこんでいる彼女。彼女の顔は真っ青で、指一本すら動かない。
血があいつの身体を染めてゆく。

俺は、ただ目の前の光景が信じられなかった。
ふと、脳裏を過ぎ^よった可能性、俺は、それを首を振り否定した。

4

そんな事はない。
あるはずがない。

だって、ついさっきまで自分の後ろにいて、楽しく笑い合っていたはずなのに。

その彼女が、なんで・・・こんな。

俺は彼女の身体に触れ、今度は恐る恐る名前を呼んだ。

「……なつき……？」

彼女は、答えなかった。

目の前を色々なものが過ぎ去って、気がつけば、俺は病院にいた。すぐ左側には椅子があったけど、座る気はない。

俺は、目の前をただじっと見つめ続けた。

どれだけの時間が過ぎたのだろうか。

でも、時間の感覚は俺にはもうなかったし、確かめる気も起きなかった。

俺はそこに立ち続け、ただ待っていたんだ。

「・・・夏希・・・」

俺がそう呟いたすぐ後、背後から大きな足音が聞こえてきた。

誰かが何か叫びながら、走ってこっちに向かってくる。

それが俺の名前だと気づいたのは、すぐのことだった。

「律斗りつと!!」

とうとう俺まで追いついたそいつは、いきなり俺の胸倉を掴んで言った。

「夏希はッ!!夏希はどうした!!」

やけに切羽詰った声音で、懸命に問いかけてくる。
俺は、やっとそいつの顔を見た。

「律斗!!夏希はどうしたんだよ……ッ!!」
「こっ……す……」

そいつは小三からの俺の友人で、それと同時に、夏希の彼氏でもあった男。

無我夢中で俺の胸倉を掴み、問いただしてくる幸介（あつひ）からは、危うさが漂っていた。今にも泣き出しそうな子供のように、ただ一生懸命で……。

でも、俺は意識が朦朧としていて、すぐに今の自分の状況を理解する事はできなかった。

「なん……で……お前が……」

そう呟いた俺に、幸介は齒軋りを立て、怒鳴る。

「なに言ってるんだよ！！律斗ッ！！」

なんだ。

なんでこいつはこんな泣き出しそうな顔で俺の胸倉を掴んでるんだ。
なんで俺を問いただすんだ。

夏希……、夏希はどうしたか……って、夏希は……。
夏希……？

俺はたしか、夏希と自転車……で……。

ああ、そうか。

俺は、やっと我に帰った。

そう、夏希は。

「……………夏希は……………」

俺は静かにそう呟いて、すぐ前にいる幸介を通り越し、もっと前の方に向かって指を差した。

幸介が、俺の指差した方向にゆっくりと振り返る。

手術室。

そう言うのが正しいだろう。

そこには、手術中と記してあった。

そう、夏希はあの中にいるんだ。

「うそ……だろ……」

幸介は目を見開き、力なくその場に膝をついた。

「……なつきい……」

幸介の瞳から、とうとう涙が流れ始める。

そして、額の前で祈るように両の手を組んだ幸介は、しばらくその場からは動かなかった。

俺は、それを黙って見ている事しかできない。

きっと彼が次に動くのは、あの扉が開く時だろう。

彼は喜びでまた泣いてしまふに違いない。

なぜなら、彼女は戻ってくるのだから。

何食わぬ顔で「これくらいいたいした事ないわよ」と言って、俺達に微笑み返すのだから。

そしたら俺は、今日言おうと決めていた言葉をきつと言っんだ。

たとえば、その言葉を聞いて彼女が表情を濁したとしても。

なあ、夏希……。

お前、死なないだろ？

静かだった。

俺には何も聞こえず、ただ思い出は過ぎ去っていくだけだった。

NO・0・9 / 葬式

天候は、あいにくの雨だった。

「空まで泣いてるみたいだよな」

隣にいる幸介が言う。

俺達は二人で黒い衣服を身にまとい、雨の中原っぱに寝転がっていた。
た。

服や身体が濡れるのも構わずに。

「お前は泣かないんだな」

みんな泣いていた。

彼女の家族も、親戚も、友人も、先生も。

堪えきれなかったか、式の最中には時々嗚咽の漏れる音も聞こえた。
誰もが彼女の死を嘆き悲しんだ。

だが、誰よりも近い位置にいたはずの幸介は、泣かなかった。

「それはお前もだろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふ、と微笑み、幸介は言う。

「あいつ・・・・・・・・優しいから」

幸介の呟いたその言葉を聞き、俺は一発で意味がわかってしまった。

「ああ・・・・・・・・」

ああ、夏希は優しいから、きっと、俺達まで泣いたら心配で死んでも死にきれないだろうな。

「化けて出るかも」

俺がふざけてそう言うと、幸介は、確かに、と苦笑を浮かべた。俺も合わせて声を上げ笑う。すると、急に笑うのをやめた幸介が、上半身だけを起こし、無表情で俺を見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ただ黙る幸介・・・・、そんな幸介を見て、俺も起き上がり、笑うのをやめて幸介と向き合う。なんとなく、幸介の言いたい事が分かる気がした。

幸介は、今度は俺から目をそらし、薄暗く広がる空を見ながら言う。

「お前、なんで夏希と二人だけであんなトコにいたんだよ」

幸介は、静かにそう問いかけた。でも、その問いかけに対して俺は何も答えず、黙って前を向く。

幸介は、今度は問いかけるのではなく、語りかけるように話しかけてきた。

「なあ、律斗」

静かだった。

本当に静かだった。

雨の音も俺には聞こえなかった。

もう何もわからない。あの空に神はいるのだろうか。

だとしても、それは本当に神なのだろうか。

罪を犯そうとした俺に罰を下した運命の管理人か、少女の死に心を痛めるだけのただの傍観者か。

どちらにせよ、俺には関係なかった。

俺にはもう虚しいぐらいに、なんの感情も湧いてこなかったんだ。

「お前、夏希の事好きだったのか？」

ただ、過ぎ去ってゆく。

楽しくて、苦しくて、愛しかった思い出。

残るのは、行き場のない衝動。

目を閉じると浮かぶのは、無邪気な彼女の笑顔。

聞こえるのは、楽しそうな彼女の笑い声。

今度卒業記念にみんなでどっか行かない？パーティーと一発やる
うよー。

お、そうだな……。お前は行きたい所どっかあんのか？

今日の花火大会すつごく楽しかった！！また三人で来れると
いいな……。

なに言ってるんだよ。また夏になればいくらでも来れんだろ。

はっ！？あんたその頭で実山さねやま受験するわけ！？しんっじらん
ない！！

ちよ、おま……。失礼な。俺はやれば出来る子なの！！

私、幸介と付き合うことになった。

そ……。か……。良かったじゃん！！お前みたいな女、きつと
幸介くらいじゃないと相手にしてもらえないもんな！！

始めまして、律斗くん。同じクラスになった石川夏希です。
よろしくさん！！

なんだお前……。おっもしれー！！おーい！幸介もこっち来いよ。

中学三年の卒業式、確かに石川夏希は死んだのだ。

NO・1 / 高校

しばらくして、俺は高校生になった。

夏希なつきが行くから受けた実山みやま高校、なのに俺は、夏希のいない実山で生活している。

これほどまでに馬鹿らしい話があるか。

「相沢」

なんで俺はここにいるんだ？
何のためにここにいるんだ？
なんで……、どうして夏希はここにいない？

「なに？」

俺は、まるで身体からだの大事な部分がすっぽりと抜けてしまったかのよう
うに何も喋らなくなった。

無表情、無関心……何もかもが『無』になり、ただ生きてるだけ。

「あだし等と昼食べない？」

中三の卒業式から、俺は人形になった。

「そんなの全然オツケーだよーん！ミホちゃん」

わけもなく。

「ホント相沢って軽いよねー！！じゃ、屋上でいい？」

見れば、声をかけてきた女子の後ろにはさらに数人の女子。

「おうよ！　しかし軽いとは失敬な。俺はちゃんと好きになった女の子一筋……」

「じゃあさっさと用意してよー！こっちは授業中ずっと空腹に耐えてたんだから」

俺^{なか}の話^なを遮り、ムスツとした表情で不満を口にする同じクラスの田^た

中恵子^{けいこ}。

しかし、その言葉とは裏腹に頬はほんのり朱色に染まっている。

そう、俺は知っている。こいつは俺に惚れていると。

萌星^{もえせい}から来たツンデーレという名の種族だ。

「おっけーラジャ」

そして、爽やかな笑顔、そして優しく明るい声で答えるイケメンな俺。

人形になる、なんて、実際はそんなわけにはいかない。

面白い事があれば笑うし、ムカつけば怒りもする。

完全に人形になるなんて、俺には不可能だな。

どんなに悲しい事があっても、つらくても、それでも時間は過ぎてくし、世界は廻ってる。

人形のままでなんて、いられるはずがない。

「よし、待ちに待ったメシだああああ！野郎共お！俺に続けえッ！！」

「ちょっと野郎とかふざけないでよ！！乙女に向かって失礼！！」

「ナヌツ!? 貴様、女子おんなこだったのか!」

「冗談も大概にしるカス」

クラス中が笑いで溢れる。
俺の一言でみんなが笑う。

「相沢バカじゃーん」

「ホントいつつも元気だよなー」

「お前悩みとかねーだろ!」

そう、俺様は美形で面白くて女にモテて、勉強のできない愛すべき馬鹿・・・簡単に言くと、学校中の人気者だった。

「相沢ー早く屋上行こうよー」

「オツケオツケー! さあ、女の子たち・・・俺についておいで!」

「しね」

NO・1 / 高校（後書き）

受験生なのでしばらく勉強に専念してきます。

なかなか次話投稿できないかもしれません；；

ですが頑張って進めていくのでこれからもよろしく願いします！

！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0132i/>

俺達はまるで迷路の中の迷子のように

2011年1月5日06時32分発行